



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	コリヤーク語の複統合性：抱合と接辞の折衷タイプ
Author(s)	呉人, 恵
Citation	北方言語研究, 5, 55-82
Issue Date	2015-03-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/58328
Type	departmental bulletin paper
File Information	06Kurebito.pdf



コリャーク語の複統合性 —抱合と接辞の折衷タイプ—

呉 人 恵
(富山大学)

1. はじめに

本稿では、コリャーク語¹ (チュクチ・カムチャツカ語族) の複統合性の特質を明らかにする。

一般に、複統合語としては北米 (特に北西部) の言語が挙げられることが多い。たとえば、Sapir (1921) では言語構造の類型の試みにおいて挙げた 21 言語のうち、複統合的言語に分類された 5 言語は、すべて北米インディアン言語 (うち、4 言語は北西部の言語) である。一方、北東アジアの言語については、複統合的な言語は見当たらないとする見解 (宮岡 1992) と、周極地域ではユーラシアから北米へと、西から東に行くにつれ統合度が高まる傾向があるとしたうえで、ユーラシア側でもチュクチ・カムチャツカ語族を複統合語として認める見解 (Fortescue 1998) がある。

統合度 (synthesis) というと、形態的単位である語の中に含まれる形態素の多寡を言うのが一般的であるが、これを客観的に計ることは必ずしも容易ではない。Greenberg (1960) は、語 (W) とこれに含まれる形態素 (M) の数の割合、すなわち、M/W により統合度を割り出している。それによると、100 の見本語の M/W の割合の平均が 3.00 以上は統合度の高い言語である (ちなみに、エスキモー語は 3.72)。100 語については断片的に具体例が挙げられているにとどまるため、この数式をコリャーク語に当てはめてみることはできない。ただし、少なくとも、(1) のような語を見るかぎり、コリャーク語が統合度の高い語を創出できることは疑いがない。

(1) t-ə-nk'e-ta-kmeŋ-ə-naly-ə-paŋka-pill'aq-ə-ŋ-ə-k-Ø

1SG.S-E-midnight-make-child-E-skin-E-hat-DIM-E-make-E-1SG.S-PFV

「私は夜中に子供用の小さな毛皮の帽子を作った」

(1) が形態的に一語をなすことは、S 項が 1 人称単数であることを表わす接周辞 t-...k が、合成された長い語幹を前後から挟み込んでいることから明らかである。(1) には、ハイフンで単純に区切れば 15 の要素が含まれている。このうち、シュワは子音連続を避けるための挿入母音であるため、数に入れない。また、t-...k (1 単主)、ta-...ŋ 「作る」はいずれも接周辞であるため、それぞれ 1 つに数える。すると、(1) は語末のゼロ形態素を含み、全部で 8 形態素から形成されていることになる。この 8 形態素には人称・数やアスペクトの情報も含まれ、一語でありながら文的意味を表わす一語文 (holophrase) になっている。こ

¹ 本稿の対象となるコリャーク語は、チャウチュヴァン (cawcəvan) 方言である。チャウチュヴァン方言の音素目録は以下のとおり : /p, t, t', k, q, v, ʔ, ʕ, c, m, n, n', ŋ, l, l', j, w, i, e, a, o, u, ə/. /t', n', l'/ はそれぞれ /t, n, l/ の口蓋化を表わす。/c/ の音価は [tʃ]。

の例から、コリヤーク語の複統合性を論じる際には、①動詞語幹がどれだけ拡張しうるか、②拡張した複合語幹がどのようにして一語文に仕立てられるのかという、派生部分と屈折部分の2つの側面からの観察が必要であることがわかる。そこで、本稿では、このような2つの側面からの観察を通じて、コリヤーク語の複統合性に関し、主に次の点を明らかにする。

(A) 派生部分に関して：

- 1) コリヤーク語の複統合性、とりわけ、動詞の側での複統合性は、抱合と派生接辞の折衷タイプを示す。すなわち、名詞の動詞語幹への抱合と、具体的な動詞概念をもち、出名動詞を作る接辞（以下、「語彙的接辞」²と省略）が、時に相補分布的に働きながら、統合度を高める根幹としての機能を担っている。
- 2) 抱合は、自立動詞語幹に名詞、副詞、形容詞などが複合的に結合することにより作られる。

(B) 屈折部分に関して：

コリヤーク語は、統語法的に二重標示タイプ (double marking type) である。アスペクトやムードを示す屈折接辞に加え、S, A, P 項との一致が動詞語幹前後につく屈折接辞によって示される。これにより複統合的な一語文の創出が可能になっている。

考察にあたっては、コリヤーク語の複統合性の特徴を明瞭に示すために、適宜、これまで複統合語の代表として挙げられてきた、北米の抱合タイプのイロコイ語族と接辞タイプのエスキモー語との比較対照もおこなう。

なお、本稿では、「複統合性 polysynthesis」は、Du Ponceau (1819) により初めて使われて以来、Boas (1911)、Sapir (1921) などによりその定義づけが再確認されつつ継承されてきた意味で用いる。すなわち、形態的単位として純然たる一語に盛り込まれうる形態素、ひいてはきわめて複雑な内容と機能の多さを指す。Baker (1996) が抱合と一致を持つ言語のみを複統合的言語とするとした見解は採用しない³。したがって、本稿では、イロコイ語族のように抱合により統合度を高める言語も、エスキモー語のように接辞により統合度を高める言語も、そしてまた、コリヤーク語のように接辞と抱合の折衷タイプを示す言語も、いずれも複統合語として扱うことになる。

加えて、複統合語という語とは、通常、動詞を指し、一語文として機能しうるものであることも重要である。ちなみに、コリヤーク語は動詞のみならず、多くの語幹を抱合した、たとえば、petat-pəlwent-ə-ʔ-iwl-ə-ʔ-əcco-wal-Ø「古びた鉄製の魚をさばく長いナイフ」とい

² 語彙的接辞とは、具体的な概念を表す接辞のことである。名詞概念を表すもの、動詞概念を表すもの、副詞概念を表すものなどが考えられるが、北米インディアン諸語に他の地域には見られないきわめて具体的な名詞概念を表す接辞があることから、これに限定して「語彙的接辞」とみなすこともある (Fortescue 1998, 亀井他編著 1996)。ただし、本稿では便宜的に具体的な動詞概念を持ったものを指して「語彙的接辞」と呼ぶことにする。

³ 詳細は、複統合性の定義を通時的に概観した Mithun (2009) を参照されたい。

ったような長い名詞も作ることができるが、本稿では動詞、すなわち、どのように一語文が創出されるかを考察の焦点とする⁴。

2. 動詞の屈折体系

本節ではまず、順番は逆になるが、上述の (B)、すなわち、複合語幹を一語文に仕上げるコリャーク語の動詞の屈折体系についてみておく。(A) を論じる際の予備情報としても、(B) は不可欠だからである。コリャーク語では、動詞が名詞項を取らずに単独で一語文を作ることが可能である。一語文は、次の (2) のような線状構造をなす。括弧の部分は屈折接辞を示す。

- (2) (S/A 一致／反転) - (ムード) - (アスペクト) - 結合価変更 - (P 一致) - 抱合語幹 - 結合価変更 - 動詞語幹／語彙的接辞 - 結合価変更 - (複数) - (アスペクト／ムード) - (A+P 一致) - (S/P 一致)

アスペクトは、不完了 vs. 完了で対立する。ムードには、直説法、可能法、希求法、仮定法がある。動詞は必須の名詞項と人称・数の一致を示す。人称は 1 人称、2 人称、3 人称を、数は単数、双数、複数を区別する。自動詞は S 項の人称・数を標示し、他動詞は A 項と P 項の人称・数を標示する。コリャーク語にはまた、A 項が P 項に対し、1 人称 > 2 人称 > 3 人称単数 > 3 人称複数の階層の下位にあることを示す反転マーカー *ne-/na-* がある。

紙幅の関係上、すべての屈折形式を挙げることはできないため、自動詞直説法の不完了・完了の屈折接辞 (表 1)、他動詞直説法の不完了・完了の屈折接辞 (表 2) のみを下に示す。「..」は語幹部分であることを示す。

表 1 自動詞直説法、不完了・完了の屈折接辞

S	直説法	
	不完了 ku-/ko-..*(-η)	完了 -Ø
1 単	t-ə**-ku-/ko-..-η	t-..-k-Ø
2 単	ku-/ko-..-η-Ø	..-i/-e/-j-Ø
3 単	ku-/ko-..-η-Ø	..-i/-e/-j-Ø

⁴ 本稿は、主に科学研究費補助金国際学術研究 (学術調査)「環太平洋の危機に瀕した原住民言語にかんする緊急調査 (平成 10～12 年度) (研究代表者: 宮岡伯人、#10041021) により 1999 年におこなった現地調査で収集したデータに基づいている。データの提供者は、ロシア連邦マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区エヴェンスク村在住の Kechgelxut Irina Gergol'tagovna さん (1936 年、カムチャツカ州スラウトノエ村生まれ) である。加えて、2014 年 11 月にロシア連邦ハバロフスク市において、補足的な聞き取り調査をおこなった。調査に協力していただいたのは、Ajatginina Tat'jana Nikolaevna さん (1955 年、マガダン州セヴェロ・エヴェンスク地区第 5 トナカイ遊牧ブリガード生まれ) である。Ajatginina, T.N. さんには、Kechgelxut, I.G. さんのようなきわめて生産的な複統合的な語の創出は見られなかったが、本稿では必要に応じてそのデータも盛り込むものとする。

なお、両者の間に見られる複統合的な語の創出能力の違いを、Ajatginina, T.N. さんご本人は出身地の違いによるものと説明していた。しかし、両者には約 20 歳の年齢差があることも無視できない。ちなみに、呉人 (2002) では、年齢差と名詞抱合の創出能力に相関性があることを指摘した。

1 双	mət-ku-/ko-..-ŋ	mət-..(-mæk)-Ø
2 双	ku-/ko-..-ŋ-tək	..-tək-Ø
3 双	ku-..-ŋ-i/-e	..-yɔŋ-i/-e-Ø
1 複	mət-ku-/ko-..-la***-ŋ	mət-..-la(-mæk)-Ø
2 複	ku-/ko-..-la-ŋ-tək	..-la-tək-Ø
3 複	ku-/ko-..-la-ŋ	..-la-j-Ø

* .. 語幹部分
 ** -ə- 挿入母音
 *** -la 複数接尾辞

表 2 他動詞直説法、不完了・完了の屈折接辞

A/P	直説法	
	不完了 ku-/ko-..(-ŋ)	完了-Ø
1 単/2 単	t-ə-ku-/ko-..-yi/-ye	t-..-yi/-ye-Ø
1 単/2 双	t-ə-ku-/ko-..-ŋ-tək	t-..-tək-Ø
1 単/2 複	t-ə-ku-/ko-..-la-ŋ-tək	t-..-la-tək
1 単/3 単	t-ə-ku-/ko-..-ŋ-ə-n	t-..-ə-n
1 単/3 双	t-ə-ku-/ko-..-ŋ-ə-net	t-..-ə-net
1 単/3 複	t-ə-ku-/ko-..-ŋ-ə-new	t-..-ə-new
2 単/1 単	k-ine-/ena-..-ŋ	ine-/ena-..-i/-e/-j
2 単/1 双	ne-/na-ku-/ko-..-mæk	ne-/na-..-mæk
2 単/1 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-mæk	ne-/na-..-la-mæk
2 単/3 単	ku-/ko-..-ŋ-ə-n	..-n
2 単/3 双	ku-/ko-..-ŋ-ə-net/-nat	..-net/-nat
2 単/3 複	ku-/ko-..-ŋ-ə-new/-naw	..-new/-naw
3 単/1 単	k-ine-/ena-..-n	ine-/ena-..-i/-e/-j
3 単/1 双	ne-/na-ku-/ko-..-mæk	ne-/na-..-mæk
3 単/1 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-mæk	ne-/na-..-la-mæk
3 単/2 単	ne-/na-ku-/ko-..-yi/-ye	ne-/na-..-yi/-ye
3 単/2 双	ne-/na-ku-/ko-..-ŋ-tək	ne-/na-..-tək
3 単/2 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-ŋ-tək	ne-/na-..-la-tək
3 単/3 単	ko-ku-..-ŋ-ə-ni-n/-ne-n	..-ni-n/-ne-n
3 単/3 双	ko-ku-..-ŋ-ə-ni-n/-ne-n	..-ni-n/-ne-n
3 単/3 複	ko-ku-..-ŋ-ə-ni-n/-ne-n	..-ni-n/-ne-n
1 複/2 単	mət-ku-/ko-..-yi/-ye	mət-..-yi/-ye
1 複/2 双	mət-ku-/ko-..-ŋ-tək	mət-..-mæk
1 複/2 複	mət-ku-/ko-..-la-ŋ-tək	mət-..-la-mæk
1 複/3 単	mət-ku-/ko-..-ŋ-ə-n	mət-..-ə-n
1 複/3 双	mət-ku-/ko-..-ŋ-ə-net	mət-..-net
1 複/3 複	mət-ku-/ko-..-ŋ-ə-new	mət-..-new
2 複/1 単	ku-/ko-ine-/ena-..-la-ŋ-tək	ine-/ena-..-tək
2 複/1 双	ne-/na-ku-/ko-..-mæk	ne-/na-..-mæk
2 複/1 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-mæk	ne-/na-..-la-mæk
2 複/3 単	ku-/ko-..-la-ŋ-ə-tkə	..-tkə
2 複/3 双	ku-/ko-..-ŋ-ə-tkə	..-tkə
2 複/3 複	ku-/ko-..-la-ŋ-ə-tkə	..-la-tkə
3 複/1 単	ne-/na-ku-/ko-..-yəm	ne-/na-..-yəm
3 複/1 双	ne-/na-ku-/ko-..-mæk	ne-/na-..-mæk
3 複/1 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-mæk	ne-/na-..-la-mæk
3 複/2 単	ne-/na-ku-/ko-..-yi/-ye	ne-/na-..-yi/-ye

3 複／2 双	ne-/na-ku-/ko-..-ŋ-tək	ne-/na-..-tək
3 複／2 複	ne-/na-ku-/ko-..-la-ŋ-tək	ne-/na-..-la-tək
3 複／3 単	ne-/na-ku-/ko-..-ŋ-ə-n	ne-/na-..-n
3 複／3 双	ne-/na-ku-/ko-..-ŋ-ə-net/-nat	ne-/na-..-net/-nat
3 複／3 複	ne-/na-ku-/ko-..-ŋ-ə-new/-naw	ne-/na-..-ŋ-ə-new/-naw

3. 統合度の高い拡張動詞語幹を作る方法

以上、第2節では動詞語幹を一語文として完成させるための、人称・数をはじめとする屈折形式を概観した。それらの屈折形式を一語文の枠組みとするならば、その枠組みの中にどれだけ統合度の高い派生動詞語幹をはめ込むことができるのか。本節ではこれについて考察する。まず、派生接辞の上述の4つのタイプについて概観し、次に抱合、さらに品詞変換タイプの派生接辞のうち、抱合と似たふるまいをする語彙的接辞についてみる。

3.1. 派生接辞

派生接辞には、①結合価変更タイプ、②語幹修飾タイプ、③名詞項修飾タイプ、④品詞変換タイプがある。①は動詞に固有の接辞であるが、②③④はそうではない。ただし、ここでは議論のテーマに沿って②③④も動詞にかかわる派生接辞のみに焦点を当てて見ていく。

3.1.1. 結合価変更タイプ

コリヤーク語には2つのタイプの結合価の変更がある。すなわち、S=P 交替と S=A 交替である。S=P 交替には、使役 (j-, j-...-et/-at, j-...-ev/-av)、逆使役 (-ŋtet/-ŋtat~et/-at) の2つのパターン、S=A 交替には、逆受動 (ine-/ena-, -cit/-cet, -tku/-tko, -et/-at)、自他同形、補充法、目的語抱合の3つのパターンがある (呉人 2013, 2014)。このうち、使役と逆受動は生産的な結合価変更の方法であるが、逆使役はそれほど生産的ではない。(3a) は自動詞文、(3b) は対応する使役 j-...-ev/-av の例、(4a) は他動詞文、(4b) は対応する逆使役 -ŋtet/-ŋtat の例、(5a) は他動詞文、(5b) は対応する逆受動 ine-/ena-の例である。他動詞活用する使役文に対し、逆使役文や逆受動文では自動詞活用する。逆使役文ではPが絶対格を取りSとなり、Aは削除される。逆受動文では、Aは絶対格に昇格し、Pは被動作性 (Affectedness) の程度により削除>道具格>場所格>方向格>与格の階層で降格する。(5b) では、Pは道具格に降格していることに注意されたい (道具格に降格するのは、移動を表わす動詞や摂食動詞などである。詳しくは呉人 (2014) を参照されたい)。なお、他動詞文か逆受動文かは、Aを前景化するのかPを前景化するのにより使い分けられる。すなわち、Pを前景化する場合には他動詞文、Aを前景化する場合には、逆受動文が選択される。(5)~(8) の例では、前景化している項を太字で示す。

- (3a) ʔətʋəʔət qamanci-j-Ø.
boat(ABS.SG) turn.over-PFV-3SG.S
「ボートが転覆した」

- (3b) (əcy-ə-nan) ʔətvəʔət na-n⁵-qamanci-v-ə-n-Ø.
 3PL-E-ERG boat(ABS.SG) INV-CAUS-turn.over-CAUS-E-3SG.P-PFV
 「彼らはボートを転覆させた」

- (4a) Mik-ne-k ənkəjep amu ya-cc-ə-lin-Ø
 who-AN-LOC(ERG) long.ago probably RES-untie-E-3SG.P-3SG.A
 kəltəyɪŋ-ə-n ujetiki-kin-Ø.
 knot-E-ABS.SG sledge-REL-ABS.SG
 「どうやら誰かがずっと前に櫓の結び目をほどいたようだ」

- (4b) Amu ənkəjep ya-cc-ə-ŋtal-lin kəltəyɪŋ-ə-n
 probably long.ago RES-untie-E-AC⁶-3SG.S knot-E-ABS.SG
 ujetiki-kin-Ø.
 sledge-REL-ABS.SG
 「櫓の結び目はどうやらずっと前にほどけたようだ」

- (5a) En'pici-te tewʔel-Ø pəce
 father-INS (ERG) dried.fish-ABS.SG for.the.moment
 ku-jpe-ŋ-ə-n-Ø enanomkaw-ja-k.
 IPFV-unload-IPFV-E-3SG.P-3SG.A store-house-LOC
 「父はまず干し魚を物置に降ろしている／降ろしていた」

- (5b) **En'pic-Ø** tewʔel-e pəce
 father-ABS.SG dried.fish-INS for.the.moment
 k-ine-jpe-ŋ-Ø enanomkaw-ja-k.
 IPFV-ANTIP-unload-IPFV-3SG.S store-house-LOC
 「父は最初に干し魚を物置に降ろしている／降ろしていた」

使役動詞語幹をさらに逆受動化することも可能である。(6a) は、自動詞語幹 umek-et「集まる」(umek「一緒に」、-et 動詞化接辞) の例、(6b) は、対応する使役動詞語幹 j-umek-ew (j- 使役、-ew 動詞化接辞) の例、(6c) はさらに逆受動化した ine-n-umek-ew の例である。

- (6a) Tumy-u mojak-ja-k vetyəl'ʔat-ə-nv-ə-ŋ
 friend-ABS.PL our-house-LOC consult-E-place-E-DAT
 y-umek-el-linew.
 RES-together-VBL-3PL.S
 「友人たちは私たちの家に相談しに集まった」

5 使役の前部要素 j- は、語中で n- に交替。

6 -ŋtat の t は後続の l に同化して l に交替。

- (6b) (ə-nan) j-umek-ew-ni-n-Ø vitʃ-u.
 3SG-ERG CAUS-together-VBL-3SG.A-3SG.P-PFV moss-ABS.PL
 「彼／彼女は苔を集めた」
- (6c) (ənnə) ajʏəve ɲelvəʃ-ə-k
 3SG.ABS yesterday reindeer.herd-E-LOC
 ʏ-inc-n-umek-ew-lin.
 RES-ANTIP-CAUS-together-VBL-3SG.S
 「彼／彼女は昨日トナカイの群れを集めた」

この他、動詞化接辞 -et/-at, -ev/-av を伴った感情自動詞と対応する他動詞的助動詞 lɲ「みなす」を伴った分析的表現も、S=A 交替の一種である（このような2種類の構造の選択要因についての詳細は Fortescue [2009] を参照されたい）。(7a)(8a) は自動詞文、(7b)(8b) は対応する分析的表現である。

- (7a) Elʔa-Ø ku-jejwec-et-ə-ŋ-Ø
 woman-ABS.SG IPFV-sympathize-INTR.ER-E-IPFV-3SG.S
 toj-ʃojacek-ə-ŋ.
 young-guy-E-DAT
 「女は若者に同情している／同情していた」
- (7b) Elʔa-ta jejwec-u ku-lɲ-ə-ŋ-ni-n
 woman-INS(ERG) sympathize-ESS IPFV-regard-E-IPFV-3SG.A-3SG.P
 toj-ʃojacek-Ø.
 young-guy-ABS.SG
 「女は若者に同情している／同情していた」
- (8a) ʃojacek-Ø ko-lmal-av-ə-ŋ-Ø elʔa-ŋ.
 guy-ABS.SG IPFV-trust-INTR.ER-E-IPFV-3SG.S woman-DAT
 「男は女を信頼している／信頼していた」
- (8b) ʃojacek-a ləmal-o ku-lɲ-ə-ŋ-ni-n
 guy-INS (ERG) trust-ESS IPFV-regard-E-IPFV-3SG.A-3SG.P
 elʔa-Ø.
 father-ABS.SG
 「男は女を信頼している／信頼していた」

3.1.2. 語幹修飾タイプ

動詞語幹修飾タイプには、屈折体系に組み込まれた形式とは別の、派生的なアスペクト的接辞、ヴォイス的接辞、動詞語幹で表わされた動作と逆の動作がおこなわれることを示す接辞などがある。まず、アスペクト的接辞には、次のようなものがある。

- (9) taŋ- 「完全に」, -lqiv/-lqev (一回性), -tku/-tko (多回性), -lʕet/-lʕat (継続性), -jv, -cij/-cej, mel-/mal- (強意), -ŋvo (始動性、習慣性), qaj- (指小性)

紙幅の関係上、ここではふるまいの特異な -ŋvo (始動性、習慣性) と 指小辞の qaj- を取りあげる。-ŋvo (始動性、習慣性)⁷は、自立動詞 ŋvo 「始まる、始める」に由来する。屈折カテゴリーである完了アスペクトと共起する場合には始動性を、不完了アスペクトと共起する場合には習慣性を表わす (呉人 2010a)。

- (10) ənno lajv-ə-ŋvo-j-Ø.
3SG.ABS walk-E-INC-PFV-3SG.S
「彼／彼女は歩き始めた」
- (11) ənno k-ajaŋo-ŋvo-ŋ-Ø yəty-ə-k.
3SG.ABS IPFV-fish-HABIT-IPFV-3SG.S lake-E-LOC
「彼／彼女はいつも湖で釣りをしている／していた」

qaj- は、動詞のみならず、形容詞、名詞語幹にも前接してその語幹を修飾する。

- (12) qaj-wajam-Ø
DIM-river-ABS.SG
「小さな川」
qaj-milut-Ø
DIM-hare-ABS.SG
「仔ウサギ」
n-ə-qaj-ə-ppulu-qin-Ø
PRP-E-DIM-E-small-PRP-ABS.SG
「ちょっと小さい」
n-ə-qaj-iwt-ə-qin-Ø
PRP-E-DIM-short-E-PRP-ABS.SG
「ちょっと短い」
qaj-vetat-ə-k
DIM-work-E-INF
「ちょっと働く」
qaj-col'-at-ə-k
DIM-salt-VBL-E-INF
「ちょっと塩する」

⁷ コリャーク語では、複数の動詞語幹の合成は一般的ではなく、動詞語幹に付加されアスペクトの意味を表わすものは、管見の限りでは ŋvo 「始まる、始める」と pl'ətku 「終わる、終える」の2つのみである。両者は文法化し接辞化したものとみなす。

3.1.3. 名詞項修飾タイプ

コリヤーク語には、名詞項を修飾するタイプの接辞として、指小性を表わす -pill'aq/-pell'aq (語末では -pil'/'-pel')、指大性を表わす -nequ/-naqo、軽侮を表す -cy がある (Kurebito, M. 2000)。これらの接尾辞は、名詞語幹に接尾する場合には名詞語幹を修飾する。

- (13) ʃujemtewilʃ-ə-pil'-Ø
man-E-DIM-ABS.SG
「1 人の小さな人」
ʃujemtewilʃ-ə-nequ-t
man-E-AUG-ABS.DU
「2 人の大きな人」
ʃujemtewilʃ-ə-cy-u
man-E-CTP-ABS.PL
「(3 人以上の) 嫌なやつ」

-pill'aq/-pell'aq、-nequ/-naqo、-cy は、数詞、指示代名詞、所有人称代名詞に接尾する場合には、これらの語幹を修飾するのではなく、主要部名詞を修飾する。

- (14) ənn'an-pil'-Ø wal'a-pel'-Ø
one-DIM-ABS.SG knife-DIM-ABS.SG
「1 本の小さなナイフ」
wuccaq-naqo-t wal'a-naqo-t
this(nearer)-AUG-ABS.DU knife-AUG-ABS.DU
「この大きな 2 本のナイフ」
yəmnəna-cy-o wal'a-cy-o
my-CTP-E-ABS.PL knife-CTP-ABS.PL
「私の (3 本以上の) 嫌なナイフ」

一方、自動詞語幹に接尾する場合にはS項を、他動詞語幹に接尾する場合にはP項を修飾する。これらの接尾辞を「名詞項修飾タイプ」と呼ぶ所以である。(15a)(15b) は指小辞の例、(16a)(16b) は指大辞の例である。名詞項やその修飾語にもこれらの接辞がついて動詞と呼応することがある。

- (15a) N-ə-ppul'u-pill'aq-qin-Ø qajəkmiŋ-ə-pil'-Ø
PRP-E-small-DIM-PRP-ABS.SG boy-E-DIM-ABS.SG
ku-jat'-pill'aq-at-ə-ŋ-Ø.
IPFV-come-DIM-VBL-E-IPFV-3SG.S
「小さな男の子が来ている／来ていた」

- (15b) Ku-tajk-ə-pill'aq-an-ŋ-ə-ni-n lili-pill'aq-ə-t.
 IPFV-make-E-DIM-ET-IPFV-E-3SG.A-3SG.P glove-DIM-E-ABS.DU
 「彼女はペアの小さな手袋を作っている／作っていた」

- (16a) Kajŋ-ə-naqo-Ø umk-ə-k ku-lejv-ə-nequ-ŋ-Ø.
 bear-E-AUG-ABS.SG forest-E-LOC IPFV-walk-E-AUG-IPFV-3SG.S
 「大きなクマが森の中を歩いている」

- (16b) Kajŋ-a ku-nu-nequ-ŋ-ni-n
 bear-INS(ERG) IPFV-eat-AUG-IPFV-3SG.A-3SG.P
 ənn-ə-nequ-Ø.
 fish-E-AUG-ABS.SG
 「クマが大きな魚を食べている」

3.1.4. 品詞変換タイプ

コリヤーク語には、様々な名詞化接辞、動詞化接辞があるが、紙幅の関係上、ここで詳細を述べることはせず、3.3.で特に名詞語幹を動詞化する接辞のうち、具体的な動詞概念を持った語彙的接辞に焦点をあて、その特質を考察するにとどめる。

3.2. 抱合

以上、コリヤーク語の派生接辞を概観したが、コリヤーク語において語幹を拡張し複統合性を高めるのに最も有効な形態的手段は、なんといっても抱合である (Kurebito, M. 2001)。よく知られた動詞への名詞語幹の抱合、すなわち、名詞抱合 (noun incorporation) では、P 項、S 項、対応する他動詞文で道具格、場所格、方向格、沿格、奪格を取る名詞、さらに主格補語などが抱合される。ただし、A 項の抱合はみられない。加えて、副詞や形容詞などもきわめて生産的に抱合され、統合度の高い拡張動詞語幹を作ることができる。

以下ではまず、動詞に対してどのような意味関係をもつ名詞語幹が抱合されるかを観察し、次に名詞抱合がさらに統合度の高い動詞語幹へとどのように拡張しうるのかをみる。

3.2.1. P 項の抱合

最も生産的にみられるのは、他動詞語幹への P 項の抱合である。P 項の抱合にともない、動詞の結合価に変化が起きる。すなわち、A 項は能格から絶対格を取る S 項に昇格し前景化する。その一方、P 項は背景化する。そのような談話情動的機能を持つ点では、S=A 交替の別のタイプである逆受動などと共通している。また、動詞は自動詞活用する。以下の例では (a) は抱合形、(b) は P 項が抱合されない分析形を示す。

- (17a) (ʏəmmo) t'-omlecʔ-ə-jece-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-woodchip-E-gather-1SG.S-PFV
 「私は木くずを集めた」

- (17b) (Yəm-nan) t'-ə-jici-new-Ø omlecŋ-o.
 1SG-ERG 1SG.A-E-gather-3PL.P-PFV woodchip-ABS.PL
 「私は木くずを集めた」
- (18a) (Yəmmo) t-ə-ŋənŋ-ə-mla-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-frame-E-break-1SG.S-PFV
 「私は(櫓の)枠を壊した」
- (18b) (Yəm-nan) t-ə-mle-n-Ø ɲənŋəŋ-ə-n.
 1SG-ERG 1SG.A-E-break-3SG.P-PFV frame-E-ABS.SG
 「私は(櫓の)枠を壊した」
- (19a) (Yəmmo) t-ə-ko-kmeŋ-ə-n-pela-w-ŋəvo-ŋ.
 1SG.ABS 1SG.S-E-IPFV-boy-E-CAUS-remain-CAUS-HABIT-IPFV
 「私は(いつも)子供を預けている／預けていた」
- (19b) (Yəm-nan) t-ə-ko-n-pela-v-ə-ŋ-ə-n
 1SG-ERG 1SG.A-E-IPFV-CAUS-remain-CAUS-E-IPFV-E-3SG.P
 kəmiŋ-ə-n.
 boy-E-ABS.SG
 「私は(いつも)子供を預けている／預けていた」

3.2.2. S 項の抱合

S 項の抱合は、自然現象の叙述に限られる。無生物名詞のみならず、生物名詞も抱合されることがある⁸。

- (20a) ku-wajam-qit-ə-ŋ-Ø
 IPFV-river-freeze-E-IPFV-3SG.S
 「川が凍っている／凍っていた」
- (20b) Wejem-Ø ku-qit-ə-ŋ-Ø.
 river-ABS.SG IPFV-freeze-E-IPFV-3SG.S
 「川が凍っている／凍っていた」
- (21a)tijk-ə-kewji-j-Ø
 sun-E-rise-PFV-3SG.S
 「日が昇った」

⁸ Sapir (1911:275) は生物名詞の抱合は無生物名詞ほどには一般的ではないとしている。(22a) の生物名詞抱合の例は I. G. Kechgelxut さんから得られたものであるが、T. N. Ajatginina さんには許容されなかった。また、他の生物名詞の抱合も得られなかった。

(21b) Tijketij kewji-j-Ø.
 sun(ABS.SG) rise-PFV-3SG.S
 「日が昇った」

(22a) ənn-inini-j-Ø
 fish-appear- PFV-3SG.S
 「魚が現れた」

(22b) ənnəʔən inini-j-Ø.
 fish(ABS.SG) appear-PFV-3SG.S
 「魚が現れた」

3. 2. 3. 道具格名詞の抱合

(23a) (Yəmmo) t-ə-ko-jənn-ə-ʔ-ojəcvat-ə-ŋ.
 1SG.ABS 1SG.S-E-IPFV-antler-E-E-play-E-IPFV
 「私は角で遊んでいる／遊んでいた」

(23b) (Yəmmo) jənn-e t-ə-k-ujicivet-ə-ŋ.
 1SG.ABS antler-INS 1SG.S-E-IPFV-play-E-IPFV
 「私は角で遊んでいる／遊んでいた」

(24a) (Yəm-nan) t-ə-pəlwənt-ə-velat-ə-n-Ø penke-n.
 1SG-ERG 1SG.S-E-money-E-buy-E-3SG.P-PFV hat-ABS.SG
 「私はお金で帽子を買った」

(24b) (Yəm-nan) penke-n pəlwənt-a t-ə-vilet-ə-n-Ø.
 1SG-ERG hat-ABS.SG money-INS 1SG.A-E-buy-E-3SG.P-PFV
 「私はお金で帽子を買った」

(25a) (Yəmmo) t'-ajyəvenŋ-ə-ʔ-en'ajace-k-Ø⁹.
 1SG.ABS 1SG.S-evening-E-E-go.out.for.a.visit-1SG.S-PFV

⁹ 一方、下の (ia)(iia) は、(25a) で時間名詞 ajyəvenŋ「晩」が抱合されているような名詞抱合の例ではない。jəqmitiw, ʔəlo はいずれも名詞ではなく副詞としてしか用いられないため、副詞抱合の例とみなすべきである（それぞれの対応する分析形 (b) を見られたい）。

(i) a. (Yəmmo) t-ə-jəqmitiw-elulqivi-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-in.the.morning-go.berry.picking-1SG.S-PFV

b. (Yəmmo) jəqmitiw t-elulqivi-k-Ø
 1SG.ABS in.the.morning 1SG.S-go.berry.picking-1SG.S-PFV
 「私は朝、ベリー摘みに出かけた」

(ii) a. (Yəmmo) t'-ə-ʔəl'o-jəl'qat-ə-k-Ø
 1SG.ABS 1SG.S-E-in.the.daytime-sleep-E-1SG.S-PFV

b. (Yəmmo) ʔəlo t-ə-jəlqet-ə-k-Ø
 1SG.ABS in.the.daytime 1SG.S-E-sleep-E-1SG.S-PFV
 「私は昼に寝た」

「私は晩にお客に出かけた」

(25b) (Yəmmo) ajyəvenŋ-a t'-en'ajace-k-Ø.

1SG.ABS evening-INS 1SG.S-go.out.for.a.visit-1SG.S-PFV

「私は晩にお客に出かけた」

(26a) (Yəmmo) t-ə-nki-ŋeqev-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-midnight-leave-E-1SG.S-PFV

「私は真夜中に出かけた」

(26b) (Yəmmo) t-ə-ŋeqev-ə-k-Ø nəki-ta.

1SG.ABS 1SG.S-E-leave-E-1SG.S-PFV midnight-INS

「私は真夜中に出かけた」

3. 2. 4. 場所格名詞の抱合

(27a) (Yəmmo) t-ə-nəmnəm-jonat-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-village-live-E-1SG.S-PFV

「私は村に住んだ」

(27b) (Yəmmo) nəmnəm-ə-k t-ə-junet-ə-k-Ø.

1SG.ABS village-E-LOC 1SG.S-E-live-E-1SG.S-PFV

「私は村に住んだ」

(28a) (Yəmmo) t-ə-vutq-ə-ŋeqev-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-darkness-E-go.out-E-1SG.S-PFV

「私は黄昏に出かけた」

(28b) (Yəmmo) vutq-ə-k t-ə-ŋeqev-ə-k-Ø.

1SG.ABS darkness-E-LOC 1SG.S-E-go.out-E-1SG.S-PFV

「私は黄昏に出かけた」

3. 2. 5. 方向格名詞の抱合

(29a) (Yəmmo) t-ə-tnup-təpyet-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-hill-climb-E-1SG.S-PFV

「私は丘に登った」

(29b) (Yəmmo) t-ə-təpyet-ə-k-Ø tənop-etəŋ.

1SG.ABS 1SG.S-E-climb-E-1SG.S-PFV hill-ALL

「私は丘に登った」

(30a) (Yəmmo) t-ə-vutq-ə-lqət-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-darkness-E-go.out-E-1SG.S-PFV

「私は黄昏にかけて出かけた」

- (30b) (Yəmmo) votq-etəŋ t-ə-lqət-ə-k-Ø.
 1SG.ABS darkness-ALL 1SG.S-E-go.out-E-1SG.S-PFV
 「私は黄昏にかけて出かけた」

3.2.6. 沿格名詞の抱合

- (31a) (Yəmmo) t-ə-kimitʃa-kaŋitku-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-clothes-look.for-1SG.S-PFV
 「私は服を探した」
- (31b) (Yəmmo) t-ə-kaŋitku-k-Ø kemetʃa-jpəŋ.
 1SG.ABS 1SG.S-E-look.for-1SG.S-PFV clothes-PRL
 「私は服を探した」

3.2.7. 奪格名詞の抱合

- (32a) (Yəmmo) t'-ə-n'ut'e-lejv-ə-tku-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-tundra-walk-E-ITR-1SG.S-PFV
 「私はツンドラから歩いた」
- (32b) (Yəmmo) nota-ŋqo t-ə-lejv-ə-tku-k-Ø.
 1SG.ABS tundra-ABL 1SG.S-E-walk-E-ITR-1SG.S-PFV
 「私はツンドラから歩いた」
- (33a) (Yəmmo) t'-ə-qipju-ll'ap-ə-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-hole-look-E-1SG.S-PFV
 「私は穴からのぞいた」
- (33b) (Yəmmo) qepjo-ŋqo t'-ə-ll'ap-ə-k-Ø.
 1SG.ABS hole-ABL 1SG.S-E-look-E-1SG.S-PFV
 「私は穴からのぞいた」

3.2.8. 主格補語の抱合

- (34a) ʃeyəlŋ-ə-n ko-ʃətʃ-ə-mowola-ŋ-Ø.
 wolf-E-ABS.SG IPFV-dog-E-bark-IPFV-3SG.S
 「オオカミが犬のように吠えている」
- (34b) ʃeyəlŋ-ə-n təqən ʃətʃ-ə-n ko-mowola-ŋ-Ø.
 wolf-E-ABS.SG as.if dog-E-ABS.SG IPFV-bark-IPFV-3SG.S
 「オオカミが犬のように吠えている」

3.2.9. 名詞句の抱合

動詞に抱合されるのは、単一名詞に限らない。1 つ以上の修飾語幹も主要部名詞とともに抱合されうる。(35a)(36a)(37a)(38a)(39a)(40a) の修飾語幹は、対応する分析形ではそれぞれ、属性叙述 (呉人 2010b) の n-....qin/-qen (35b)(36b)、分詞の ʃe-/ʃa-....lin/-len (37b)、所

有の-in/-en (38b)、関係の -kin/-ken (39b)(40b) を取る。

(35a) (Yəmmo) t-iwl-utt-ə-mle-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-long-stick-E-break-1SG.S-PFV

「私は長い木を折った」

(35b) (Yəmmo) n-iwl-ə-qin-Ø

uttəut

1SG.ABS PRP-long-E-PRP-ABS.SG stick(ABS.SG)

t-ə-mle-n-Ø.

1SG.A-E-break-3SG.P-PFV

「私は長い木を折った」

(36a) qejaly-ə-moqa-yala-j-Ø

cold-E-rain-pass-PFV-3SG.S

「冷たい雨が止んだ」

(36b) N-ə-qejaly-ə-qin-Ø

muqemuq

yala-j-Ø.

PRP-E-coldness-E-PRP-ABS.SG rain(ABS.SG) pass-PFV-3SG.S

「冷たい雨が止んだ」

(37a)(Yəmmo) t-ə-jomja-naly-ə-n-ə-pɿ-av-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-dye-skin-E-CAUS-E-dry-CAUS-E-1SG.S-PFV

「私は染色した毛皮を乾かした」

(37b) (Yəm-nan) t-ə-n-ə-pɿ-av-ə-n-Ø

1SG-ERG 1SG.A-E-CAUS-E-dry-CAUS-E-3SG.P-PFV

ya-jomja-len-Ø

naly-ə-n.

PTCP-dye-PTCP-ABS.SG skin-E-ABS.SG

「私は染色した毛皮を乾かした」

(38a)t-ə-kmeŋ-ə-məny-elyətav-ə-k-Ø

1SG.S-E-child-E-hand-clean-E-1SG.S-PFV

「私は子供の手を洗った」

(38b) Kəmiŋ-in-Ø

məny-ə-t

t-ilyətw-net-Ø.

child-POSS-ABS.SG hand-E-DU 1SG.A-clean-3DU.P-PFV

「私は子供の手を洗った」

(39a) (Yəmmo) t'-om-l'əql'aŋ-kemetfa-n'-cocm-av-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-warm-winter-clothes-CAUS-get.prepared-CAUS-E-1SG.S-PFV

「私は冬の衣類を準備した」

(39b) (Yəm-nan) n-om-qine-w

ləqləŋ-kine-w

1SG-ERG PRP-warm-PRP-ABS.PL winter-REL-ABS.PL

kimitʃa-w t'-ə-n-cocm-aw-naw-Ø.
 clothes-ABS.PL 1SG.A-E-CAUS-get.prepared-CAUS-3PL.P-PFV
 「私は冬の衣類を準備した」

(40a)(ʏəmmo) t'-əcco-wala-java-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-cut.fish-knife-use-1SG.S-PFV
 「私は魚をさばくためのナイフを使った」

(40b) (ʏəm-nan) t-ə-java-n-Ø əcco-kin-Ø
 1SG-ERG 1SG.A-E-use-3SG.P-PFV cut.fish-REL-ABS.SG
 wala-Ø.
 knife-ABS.SG
 「私は魚をさばくためのナイフを使った」

3.2.10. 複数名詞句の抱合

コリャーク語ではさらに、(41a)(42a) のように、P 項あるいは S 項が他の斜格名詞とともに動詞に抱合されることもある。また、(42a) で見るように、抱合される名詞は修飾語を伴うことも可能である。この場合、P 項あるいは S 項が動詞の直前に抱合され、斜格名詞はその前に配置される。必ずしも常に許容されるわけではないが、(43a) のように、2 つの P 項が並列的に抱合されることもありうる。

(41a)(ʏəmmo)
 1SG.ABS
 t'-ə-toja-ajʏəven'ŋ-ə-qoja-n-omak-av-ə-k-Ø.
 1SG.S-E-new-evening-E-reindeer-CAUS-together-VBL-E-1SG.S-PFV
 「私は朝早くトナカイを集めた」

(41b) (ʏəm-nan) toj-ajʏəven'ŋ-a qoja-w
 1SG-ERG new-evening-INS reindeer-ABS.PL
 t-ə-n-umek-ew-new-Ø.
 1SG.A-E-CAUS-together-VBL-3PL.P-PFV
 「私は朝早くトナカイを集めた」

(42a) (ʏəmmo)
 1SG.ABS
 t-ə-ləqlaŋ-kemetʃ-ə-lqəl-qoja-nm-at-ə-k-Ø.
 1SG.S-E-winter-clothes-E-material-reindeer-kill-ANTIP-E-1SG.S-PFV
 「私は冬用コートのための材料にトナカイを殺した」

(42b) (ʏəm-nan) ləqləŋ-kin-Ø kimitʃ-ə-lqəl-a
 1SG-ERG winter-REL-ABS.SG clothes-E-material-INS

qoja-ŋa t-ə-nm-ə-n-Ø.
 reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-kill-E-3SG.P-PFV
 「私は冬用コートのための材料にトナカイを殺した」

(43a)(Yəmmo) t'-ə-milyijocy-ə-kanca-akmet-ə-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-match-E-cigarette-take-E-1SG.S-PFV
 「私はマッチとタバコを買った」

(43b)(Yəm-nan) t-ekmit-ə-new-Ø milyijocy-ə-n to
 1SG-ERG 1SG.A-buy-E-3PL.P-PFV match-E-ABS.SG and
 kanca-w.
 cigarette-ABS.PL
 「私はマッチとタバコを買った」

3.2.11. 副詞の抱合

名詞抱合によりつくられた複合的動詞語幹は、さらに副詞を抱合することにより統合度を高めることが可能である。形容詞語幹の中には、動詞に抱合されることにより副詞的な意味を持つものがある。たとえば、mejŋ「大きい」は「たくさん」の意味に、tuj「新しい」は「ちょうど」の意味になる。すなわち、(44a)では、mejŋ「大きい」はjetem「テントカバー」ではなく、動詞nni「縫う」を修飾している。また、(45a)のtuj「新しい」はqleva「パン」ではなく、動詞ekmit「取る」を修飾している。

(44a)(Yəmmo) t-ə-nk'e-mejŋ-ə-jetem-ə-nni-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-midnight-big-E-tent.cover-E-sew-1SG.S-PFV
 「私は真夜中にたくさんテントを縫った」

(44b)(Yəm-nan) nəki-ta unmək ɲənvəq jetem-u
 1SG-ERG midnight-INS very many tent.cover-ABS.PL
 t-ə-nni-new-Ø.
 1SG.S-E-sew-3PL.P-PFV
 「私は真夜中にたくさんテントを縫った」

(45a)(Yəmmo) t-ə-jəqmitiw-tuj-qleva-kmit-ə-k-Ø.
 1SG.ABS 1SG.S-E-in.the.morning-new-bread-buy-E-1SG.S-PFV
 「私は朝、パンを買ったばかりだ」

(45b)(Yəm-nan) jəqmitiw vitku qəleva-n
 1SG-ERG in.the.morning just bread-ABS.SG
 t-ekmit-ə-n-Ø.
 1SG.A-buy-E-3SG.P-PFV
 「私は朝、パンを買ったばかりだ」

3.3. 出名動詞を形成する語彙的接辞

名詞抱合は、動詞語幹に名詞を抱合することによって形成される。一方、動詞語幹の代わりに動詞の意味をもつ語彙的接辞を名詞語幹に接合することによっても、同様の意味の複統合的な一語文を創出することができる。名詞抱合と語彙的接辞には、そのふるまいにおいていくつかの共通点がある（呉人 2001）。

第一に、語彙的接辞は自立的な動詞語幹同様、P 項、S 項、その他、方向格名詞や道具格名詞に接続する。

(46) P 項に接続する語彙的接辞：

-ŋel/-ŋal 「集めに行く」、-ŋta/-ŋəta 「取ってくる」、-u/-o 「食べる、飲む、殺す」、
te-...-ŋ/ta-...-ŋ 「作る」、-yili/-yele 「探す」、-ŋəjt 「狩る」、-tve/-tva 「脱ぐ」、-yijke
「トナカイを橇牽引用に捕まえる」

(47) S 項に接続する語彙的接辞：

-ŋtet/-ŋtat 「脱げる」¹⁰、-tuje/-toja 「ほどける」、-juŋ/-joŋ 「始まる」、-et/-at 「起きる」

(48) 方向格名詞に接続する語彙的接辞：

-jt 「に行く」

(49) 道具格名詞に接続する語彙的接辞：

-lŋet 「で行く」、-tku/-tko 「で切る」

第二に、名詞抱合同様、P 項＋語彙的接辞による出勤名詞は自動詞活用する。

(50) (Yəmmo) t-ə-kmeŋ-ə-ŋta-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-child-E-go.for-1SG.S-PFV

「私は子供を連れてきた」

(51) (Yəmmo) t-acŋ-o-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-boiled.fish-eat-1SG.S-PFV

「私は煮魚を食べた」

第三に、名詞抱合同様、語彙的接辞は修飾語を伴った名詞句に接続することが可能である。

¹⁰ この接尾辞は、(4b) で見た結合価変更タイプのひとつである逆使役接尾辞と同じ形式であることに注意されたい。

- (52) (Yəmmo) t-en'pici-melyəj-ŋəta-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-father-gun-fetch-1SG.S-PFV
「私は父の銃を持ってきた」
- (53) (Yəmmo) t-ənp-ə-kajŋ-ə-ŋəjt-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-old-E-bear-E-hunt-E-1SG.S-PFV
「私は年老いた熊を狩った」
- (54) (Yəmmo) t-ə-ta-kmeŋ-ə-paŋka-pill'aq-ə-ŋ-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-make-child-E-hat-DIM-E-make-E-1SG.S-PFV
「私は子供用の小さい帽子を作った」

第四に、名詞抱合同様に、語彙的接辞は主要な名詞項とともに斜格名詞を伴うこともできる。さらに、副詞も取ることが可能である。ただし、語彙的接辞が複数の P 項に接続した例は見られない¹¹。

- (55) (Yəmmo)
1SG.ABS
t-ə-qoja-naly-ə-ta-kmeŋ-ə-paŋka-pill'aq-ə-ŋ-ə-k-Ø.
1SG.S-E-reindeer-skin-E-make-child-E-hat-DIM-E-make-E-1SG.S-PFV
「私はトナカイの毛皮で子供用の小さな帽子を作った」
- (56) (Yəmmo) t-umk-ə-majŋ-ə-vəfaj-ŋəjt-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-forest-E-big-E-grass-mow-E-1SG.S-PFV
「私は森で草をたくさん刈った」

おそらく、名詞抱合と語彙的接辞による出名動詞の以上のような共通性により、自立動詞と同じ意味をもつ語彙的接辞が併存する場合には、語彙的接辞が優先され、名詞抱合がおこなわれないことがある。このようなペアには、enajej vs. -yili/-yele 「探す」、pje-ŋtet vs. -ŋtet/-ŋtat 「脱げる」がある。次の (57)~(58) までの例では、a. は語彙的接辞、b. は抱合、c. は分析的表現の例である。

- (57a)(Yəmmo) t-ə-wapaq-yele-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-fly.agaric-look.for-1SG.S-PFV

¹¹ 一方、チュクチ語では語彙的接辞が2つのP項と接続した次のような例がみられる (Kurebito, T. 1998)。

korpa-kawkaw-kante-nŋa-γat-Ø
grain-bread-candy-get-3PL.S-PFV
「彼らは穀物とパンとキャンディを手に入れた」

「私はベニテングダケを探した」

- (57b) *($\gamma\text{əmmo}$) t-ə-wapaq-enajej-ə-k-Ø
1SG.ABS 1SG.S-E-fly.agaric-look.for-E-1SG.S-PFV
(57c) ($\gamma\text{əmmo}$) t-enajej-ə-n-Ø wapaq-Ø
1SG.ABS 1SG.A-look.for-E-3SG.P-PFV fly.agaric-ABS.SG
「私はベニテングダケを探した」

- (58a) penke-ŋtet-i-Ø
hat-come.off-PFV-3SG.S
「帽子が脱げた」
(58b) *penke-pje-ŋtet-i-Ø
hat-take.off-AC-PFV-3SG.S
(58c) Penke-n pəj-ə-ŋtet-i-Ø.
hat-ABS.SG take.off-E-AC-PFV-3SG.S
「帽子が脱げた」

一方、自立動詞 tejk「作る」、pje「剥がす」、jy「捕まえる」にはそれぞれ対応する語彙的接辞 te-...-ŋ/ta-...-ŋ, -tve/-tva, -yijke があるが、逆受動接辞の -et/-at, ine-/ena- を伴った場合のみ名詞抱合が可能になる。

- (59a)($\gamma\text{əmmo}$) t-ə-ta-macina-ŋ-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-make-car-make-E-1SG.S-PFV
「私は車を修理した」
(59b) ($\gamma\text{əmmo}$) t-ə-macina-tejk-et-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-car-make-ANTIP-E-1SG.S-PFV
「私は車を修理した」
(59c)($\gamma\text{əm-nan}$) t-ə-tejk-ə-n-Ø macina-Ø.
1SG-ERG 1SG.A-E-make-E-3SG.P-PFV car-ABS.SG
「私は車を修理した」
(60a)($\gamma\text{əmmo}$) t-ə-penke-tve-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-hat-take.off-1SG.S-PFV
「私は帽子を脱いだ」
(60b) ($\gamma\text{əmmo}$) t-ə-penke-pj-et-ə-k-Ø.
1SG.ABS 1SG.S-E-hat-take.off-ANTIP-E-1SG.S-PFV
「私は帽子を脱いだ」
(60c)($\gamma\text{əm-nan}$) penke-n t-ə-pj-ə-n-Ø.
1SG-ERG hat-ABS.SG 1SG.A-E-take.off-E-3SG.P-PFV
「私は帽子を脱いだ」

(61a) (yəmmo) t-ə-qoja-yijke-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-reindeer-catch-1SG.S-PFV

「私はトナカイを捕まえた」

(61b) (yəmmo) t-ə-qoja-ʔ-ena-jy-at-ə-k-Ø.

1SG.ABS 1SG.S-E-reindeer-E-ANTIP-catch-ANTIP-E-1SG.S-PFV

「私はトナカイを捕まえた」

(61c) (yəm-nan) qoja-ŋa t-ə-jy-ə-n-Ø.

1SG-ERG reindeer-ABS.SG 1SG.A-E-catch-E-3SG.P-PFV

「私はトナカイを捕まえた」

4. イロコイ語族とエスキモー語との対照

以上、コリャーク語の動詞の複統合性について観察してきた。それにより、コリャーク語の複統合性には次の特徴が指摘された。

- (I) 動詞語幹は、抱合と、数は限られているものの時に抱合の補完的な機能を果たす語彙的接辞とで拡張される、抱合と接辞の折衷タイプを示す。
- (II) 派生部分はさらに、結合価変更接辞、語幹修飾接辞、名詞項修飾接辞などにより拡張される。
- (III) 屈折部分は、人称・数、アスペクト、ムードなどにより、複統合的な一語文の創出を可能にしている。

では、コリャーク語のこのような複統合性の特徴は、通言語的なコンテキストにおいてみると、どのように位置づけられるであろうか？

上述のとおり、複統合性では北米の諸言語が例にあげられることが多いが、実際には、北米に限らず、メソ・アメリカ、シベリア、北オーストラリア、パプア・ニューギニアなど広く系統の異なる言語に見られることが知られている (Evans & Sasse 2002)。ただし、紙幅の関係上、以下では、そのうち2つの言語を取り上げるにとどめる。すなわち、抱合が統合度を高めるのに重要な役割を担っている点でコリャーク語と共通している北米のイロコイ語族と、具体的な動詞概念をもつ語彙的接辞を持つ点で共通しているエスキモー語である。ちなみに、イロコイ族は代表的な抱合的言語としてしばしば引き合いに出されている (Boas 1911, Sapir 1911¹², Baker 1996, Mithun 2009)。一方、エスキモー語は、抱合はおこなわず、もっぱら語彙的接辞を含む接尾辞により複統合的な語を作るが、複統合性の内容は、コリャーク語に比べはるかに複雑である。コリャーク語をこの両言語と概略的に対照することにより、コリャーク語の複統合性の特質を浮き彫りにしてみたい。なお、イロコイ語族については、Lounsbury (1978)、Chafe (1996)、Mithun (2009) を、エスキモー語については、宮岡 (2002)、Miyaoka (2012) を参照する。

¹² Sapir (1911:275/1990:34) は、イロコイ語族について、‘No more thorough-going instance of a noun-incorporating language can be required than *Iroquois*.’ と述べている。

4.1. イロコイ語族

イロコイ語族は、複統合的、屈折的、抱合的な言語として知られている (Lounsbury 1978)。南イロコイ語と北イロコイ語に分かれるイロコイ語族では、南イロコイ語のチェロキー語 (Cherokee) を除くと生産的な名詞抱合がおこなわれている。動詞は次のような構造をなす (Lounsbury 1978) (定形動詞を形成するのに必須要素は太字)。

(62) 屈折接辞-人称・数・性 (主語・目的語) -再帰要素-抱合名詞語根-動詞語根-派生
接辞-アスペクト

(63a)(63b) は、セネカ語 (Seneca) の自動詞語幹からなるミニマルな一語文の例である (Chafe 1996:60)。

(63a) ha-tha'-ha?

M.A-talk-HABIT

'He talks.'

(63b) o-tgi-?

N.P-be.dirty-STAT

'It is dirty.'

典型的な抱合名詞語根は、統語的に他動詞目的語にあたる名詞であるが、道具や場所を表わす名詞も含まれる。(64a)~(64h) はモホーク語 (Mohawk) 語の例である (Mithun 2009:8)。

(64a) k-ate-nawir-óhar-e'

1SG.A-MID-tooth-wash-STAT

'I'm brushing my teeth.'

(64b) kahserie'táneren'

'It is string-tied' = 'It is tied up with string.'

(64c) ra-hsharí:ne'

'He is leash-leading, leading it on a leash.'

(64d) onke'nionhsókha

'I nose-leak' = 'My nose is running.'

(64e) rahonwì:sere'

'He was container-dragged = driving by.'

(64f) tentewaronta'serónnion'

'We'll log-build it, build it out of logs.'

(64g) ratiia'titáhkhe'

'They are body-moving' = 'they are riding.'

(64h) tahonathahitáhkhe'

'They are road-moving, walking along.'

さらに、抱合は単一名詞に限られず、名詞句の抱合も可能である。Lounsbury (1978:337) は、「彼は祭壇の向こう側に行った」という意味の wa?thatekhlakslatokęhti?tslata'sê という複統合的な語を挙げている。グロスがついていないため、形態素分析ができないが、Lounsbury (1978) によれば、「祭壇」は「聖なる」と「テーブル」からなる複合名詞であり、このうち「テーブル」はさらに「食事を置くのに使われるもの」というように、4つの形

態素からなる複合的な派生名詞である。ただし、複数の名詞句の抱合などは、管見の限りでは確認されていない。

一方、コリャーク語や次節で述べるエスキモー語に見られるような、具体的動詞概念を表わす語彙的接辞は管見の限りでは確認されていない。

4.2. エスキモー語

一方、エスキモー語は、複統合的な言語の典型として知られている。

動詞は次のような線状構造をなす (Miyaoka 2012:85)。

(65) STEM¹+DERIVATIONAL SUFFIX^{0~}+INFLECTIONAL SUFFIX^{1~3}

接尾辞だけが複統合性を保証している、純接尾辞タイプを示すため、語幹合成はなく、派生のもととなるのは常に単一語幹である。一方、語幹の生産的な拡張をもたらすのは、方言によっては 300~500 種類にもなるというきわめて多様な派生接尾辞であり、ゼロから理論的には無限大に幅広く語幹に接続しうる。さらに語末につくのは、語の種類により異なる 1 つから 3 つの屈折接尾辞である。すなわち、エスキモー語の複統合性を支える最大の要素は、派生接尾辞であると言っても過言ではない。

派生接尾辞は、①語幹修飾タイプ、②結合価変更タイプ、③品詞変換タイプに分けられる。この点は、コリャーク語と共通している。また、このうち、③の品詞変換タイプで名詞語幹につき出名動詞を作る接辞の中には、コリャーク語同様、具体的動詞概念を表わす語彙的接尾辞がある。「狩る」「捕まえる」「食べる」「作る」など、コリャーク語と意味の共通する接尾辞も多い (Jacobson 1984)。

(66) -cur	'hunt, seek, check'	-nge	'acquire'
-kliute	'acquire, claim as own'	-karci	'buy'
-laar	'get a new'	-ci	'buy'
-tur	'eat, wear, use'	-te	'catch'
-lgir	'take along'	-liqe	'catch a lot of'
-ssaag	'fetch from accessible place'	-tar	'fetch from nature'
-li	'make'	-kiur	'prepare'

次の (67a) は、-li 'make' からなる宮岡 (2002:51) によるエスキモー語の例、(67b) はこれとできるだけ平行になるように作例したコリャーク語の例である。

- (67a) qaya-pi-li-unga
kayak-genuine-make-IND.1SG
'I am making a genuine kayak.'

- (67b) t-ə-ku-lyi¹³-t-ujetik-ə-ŋ-ə-ŋ
 1SG.S-E-IPFV-genuine-make-sledge-E-make-E-IPFV
 「私は本物の橇を作っている／作っていた」

コリヤーク語でも、ujetik「橇」が唯一の名詞語幹で、それ以外の要素はすべて屈折あるいは派生接辞である。とはいえ、派生接辞を全体的に見てみると、その種類の豊富さ、機能的な幅広さ、生産性と反復可能性の高さにおいて、コリヤーク語はエスキモー語にはるかに及ばない。とりわけ、エスキモー語の高い統合度を保証する重要な仕掛けである、埋め込み構造を持った多層動詞の形成や、動詞性と名詞性との間の幾重もの品詞変換などの複雑な語形成は、コリヤーク語では不可能である。

次は、エスキモー語の多層動詞文 (68a) と複雑な品詞変換の文 (69a) と、対応するコリヤーク語の文 (68b)(69b) である。いずれも、コリヤーク語では、分析的にしか表されないことに注意されたい。

- (68a) qaya-pi-li-yuk-aqa [angun-Ø]
 kayak-genuine-make-A'.think-RCL-ABS.1SG.SG man-ABS.SG
 'I thought he [the man] was making a genuine kayak.' (宮岡 2002: 52)

- (68b) (yəmmo) t-ə-k-iv-ə-ŋ amu əno [ʃojacek-a]
 1SG.ABS 1SG.S-E-IPFV-think-E-IPFV probably man-INS(ERG)
 ku-tejk-ə-ŋ-ni-n l'əyi-ʃətvəʃət.
 IPFV-make-E-IPFV-3SG.A-3SG.P genuine-boat(ABS.SG)
 「私は彼（男）が本物のボートを作っていると思った」

- (69a) qaya-pi-li-ci-it-ua
 kayak-genuine-make-GER-PRV-IND.1SG
 'I don't know how to make a genuine kayak.' (宮岡 2002: 51)

- (69b) yəm-nan (ujŋe) e-jyulet-ke (miŋkəji)
 1SG-ERG not not-know-not how
 ləye-te-ʃətv-ə-ŋ-yiŋ-ə-n.
 genuine-make-boat-E-make-NML-E-ABS.SG
 「私は本物のボートをどうやって作るのか知らない」

以上から、コリヤーク語は、形態素の多寡だけを問題にするのであれば、エスキモー語にも匹敵しうるような長い語を創出することができるが、上記のエスキモー語のような複雑な構造は創出できないことがわかる。

¹³ ujetik「橇」を修飾する lyi-「本物の」は、ujetik に直接に前接するのではなく、語彙的接周辞 t-...-ŋ「作る」の前に置かれていることに注意されたい。

ただし、コリヤーク語と同系のチュクチ語では、形容詞や動詞述語を複数含み、それらが等位的につながっているだけではなく、目的節に相当する (70)(71) のような語も見られる (呉人徳司 p.c.)¹⁴。

- (70) *ya-jʔa-kətyənt-ə-n-omak-aw-qaa-yatat-len*
RES-very.much-run.fast-E-CAUS-together-VBL-reindeer-drive-3SG.S
「彼／彼女は早く走ってトナカイを追うために準備した」
- (71) *mas-ləla-pəlm-armaŋʔ-ə-lʔalan-jəlqat-ə-mŋo-rkən-Ø*
almost-eye-blur-strong-E-winter-sleep-E-prepare-PRS-3SG.S
「彼はほとんど目が見えず、強くて、冬眠するために準備している」

5. おわりに

本稿では、コリヤーク語の動詞語幹がどれだけ拡張しうるか (派生部分)、拡張した複合語幹がどのように一語文に仕立てられるのか (屈折部分) という2つの側面から、コリヤーク語の複統合的性格を考察した。それにより明らかになった大枠は、次のとおりである。

- ① コリヤーク語の動詞の複統合性は、生産的な語幹合成である抱合と、結合価変更タイプ、語幹修飾タイプ、名詞項修飾タイプ、品詞変換タイプの派生接辞により保証されている。
- ② 加えて、S, A, P 項との一致や、アスペクト、ムードなどが標示されることにより、複統合的な一語文の創出が可能になっている。
- ③ 抱合をおこなう点ではイロコイ語族との類似性が見られる一方で、具体的動詞概念を表わす接辞を持つ点では、エスキモー語との類似性が見られる。ただし、現在のところ確認されているのは単文相当の語にかぎられ、エスキモー語に見られるような多層動詞文や品詞を何度も転換する反復的派生は観察されていない。

【略語表】

A=agent-like argument	ABL = ablative	ABS = absolutive
AC=anticausative	ALL=allative	AN=animate
ANTIP=antipassive	AUG=augmentative	CAUS=causative
CTP=contemptuous	DAT=dative	DIM=diminutive
DU=dual	E=epenthetic	ERG=ergative
ESS=essive	ET=-et/-at	GER=gerund
HABIT=habitual	INC=inceptive	IND=indicative

¹⁴ コリヤーク語では、動詞語幹に付加される、動詞概念を表わす語彙的接辞として、移動を表わす *-lqiw/-lqew* 「～しに行く」が1つ確認されている。動詞語幹との複合語幹では、動詞語幹が移動の目的を表わす従属部、これに接続される語彙的接辞のほうが移動そのものを表わす主要部になる。

ejəŋu-lqiv-ə-k 「魚釣りに行く」, *kalicit-ə-lqiv-ə-k* 「勉強しに行く」, *elu-lqiv-ə-k* 「ベリー摘みに行く」

INS=instrumental	INTR.ER=intransitivizer	INV=inverse
IPFV=imperfective	INF=infinitive	ITR=iterative
LOC=locative	M.A=masculine agent	MID=middle
NML=nominalizer	N.P=neuter patient	P=patient-like P-argument
PRV=privative	PTCP=participle	PFV=perfective
PL=plural	POSS=possessive	PRL=prolative
PRS=present	PRP=property predication	PTCP=participle
RCL=relative-clausal	REL=relational	RES=resultative
S=single argument	SG=singular	TR=transitive
VBL=verbalizer		

【参考文献】

- 亀井孝・河野六郎・千野栄一（編著）（1996）『言語学大辞典 第6巻 述語編』東京：三省堂。
- 呉人 恵（2001）「コリヤーク語の出名動詞と名詞抱合」津曲敏郎編『環北太平洋の言語』（「環太平洋の言語」成果報告書シリーズ A2-002）7: 101-124. 吹田：大阪学院大学情報学部。
- 呉人 恵（2002）「語りに見るコリヤーク語の変容－ロシア語の影響という側面から」煎本孝編『東北アジア諸民族の文化動態』253-282. 札幌：北海道大学図書刊行会。
- 呉人 恵（2010a）「コリヤーク語の -Nvo が表わす始動アスペクトと習慣アスペクト」『北海道立北方民族博物館研究紀要』19: 43-55.
- 呉人 恵（2010b）「コリヤーク語の属性叙述－主題化のメカニズムを中心に」『言語研究』138: 115-147.
- 呉人 恵（2013）「コリヤーク語動詞の自他対応－中立型か他動詞化型か－」北方言語ネットワーク編『北方言語研究』3: 85-109.
- 呉人 恵（2014）「コリヤーク語における S=A 交替」『北方人文研究』7: 25-53.
- 宮岡伯人（1992）「環北太平洋の言語」宮岡伯人編『北の言語：類型と歴史』東京：三省堂。
- 宮岡伯人（2002）『「語」とはなにか エスキモー語から日本語をみる』東京：三省堂。

- Baker, Mark C. (1996) *The Polysynthesis Parameter*. Oxford: Oxford University Press.
- Boas, Franz (1911) Introduction. *Handbook of American Indian Languages*. Bureau of American Ethnology Bulletin 40.1. Washington, D.C.: Government Printing Office.
- Chafe, Wallace, L. (1996) Sketch of Seneca, an Iroquoian Language. In: I. Goddard (ed.), *Language* 17: 551-579. Washington: Smithsonian Institution.
- Du Ponceau, Peter S. (1819) Report of the General Character and Forms of the Languages of the American Indians. *American Philosophical Society (Transactions) of Historical and Literary Committee* 1, xvii-xlvi.
- Evans, Nichols and Sasse, Hans-Jürgen (eds.) (2002) *Problems of Polysynthesis*. Studia

- Typologica 4. Berlin: Akademie Verlag.
- Fortescue, Michael (1998) *Language Relations across Bering Strait, Reappraising the Archaeological and Linguistic Evidence*. London and New York: Cassell.
- Fortescue, Michael (2009) Analytic vs. synthetic verbal constructions in Chukchi and West Greenlandic. *Typological Studies in Language* 86: 35-49.
- Greenberg, Joseph H. (1960) A Quantitative Approach to the Morphological Typology of Language. *International Journal of American Linguistics* 26: 178-194.
- Jacobson, Steve A. (1984) *Yup'ik Eskimo Dictionary*. Fairbanks: Alaska Native Language Center.
- Kurebito, Megumi (2000) Argument-Modifying Type of Diminutive/Augmentative Suffixes in Koryak. In O. Miyaoka (ed.). *Languages of the North Pacific Rim* 5: 139-157. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Kurebito, Megumi (2001) Noun incorporation in Koryak. In O. Miyaoka and F. Endo (eds.). *Languages of the North Pacific Rim* 6: 29-58. Suita: Faculty of Informatics, Osaka Gakuin University.
- Kurebito, Tokusu (1998) A Report on Noun Incorporation in Chukchi. In O. Miyaoka and M. Oshima (eds.). *Languages of the North Pacific Rim* 4: 97-113. Kyoto: Graduate School of Letters, Kyoto University.
- Lounsbury, Floyd G. (1978) Iroquoian languages. In B. G. Trigger (ed.). *Handbook of North American Indians* 15: 334-343. Washington, D.C.: Smithsonian Institution.
- Mithun, Marianne (2009) Polysynthesis in the Arctic. In: M. Mahieu and N. Tersi (eds.) *Variations on Polysynthesis, The Eskaleut Languages*. 3-17. Amsterdam: John Benjamins.
- Miyaoka, Osahito (2012) *A Grammar of Central Alaskan Yupik (CAY)*. Mouton Grammar Library 58. Berlin: De Gruyter Mouton.
- Sapir, Edward (1911) Problem of Noun Incorporation in American Languages. *The American Anthropologist* 13 (2): 250-282.
- Sapir, Edward (1921) *Language: an Introduction to the Study of Speech*. New York: Harcourt Brace & World.

Polysynthesis in Koryak:
an Eclectic Type Combining Incorporation and Affixation

Megumi KUREBITO
(University of Toyama)

The present paper aims to examine the polysynthetic characteristics of the Koryak verb, paying attention to both the derivational and inflectional processes that apply to it. More concretely, it tries to answer the following questions.

- 1) By what means can a verbal stem be expanded through derivational processes?
- 2) How is the expanded complex verbal stem completed as a holophrase?

The result of the examination reveals the following points.

- (A) First, the verbal polysynthesis of Koryak is ensured by incorporation, especially noun incorporation (NI). In NI, polysynthetic incorporative stems are derived through NP incorporation, multiple nominal incorporation, double P-argument incorporation (though not readily accepted), and adverbial incorporation.
- (B) In addition, various derivational affixes such as valency-changing, stem-modifying, argument-modifying, and word-class-changing ones, help to promote the degree of the verbal synthesis.
- (C) Similar to verb stems in NI, derivational affixes that express concrete verbal meanings can also derive polysynthetic holophrases by (quasi)-incorporating one or more modifiers, and adverbial stems.
- (D) Verbal inflectional categories such as aspect, mood, and agreement in person and number with the core arguments enclose and shape the polysynthetic incorporative stem into a holophrase that can stand alone without a core argument.

The present paper also suggests that Koryak shows an eclectic type of polysynthesis combining some characteristics of the incorporating type (e.g., Iroquian) and affixing type (e.g., Eskimo). However, Koryak is derivationally far less complex and elaborated when compared with Eskimo, which has extremely polysynthetic verbs with complex embedded constructions and repetitive word-class-changing processes.

(くれびと・めぐみ kurebito@hmt.u-toyama.ac.jp)